

終戦から五十七回目の暑い夏。当時の日本人は私を含め、その日その日を生き抜くのに精いっぱいだった。その延長で二十一世紀まで来てしまっ

# 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
じ けん 庵 めん 久 く 栄 え

①

た。原爆投下後、焼け野原と化した広島。都市焼失と文化炎上。インスタストリアル・デザイナーを志した原典として、広島焼け跡は常に私の脳裏によみがえる。

海軍兵学校生だった私は終戦を山口県海軍防分校で迎えた。校庭で玉音放送を聞

いたが、すぐには事態を理解できなかった。復員が始まった。我々は私物をまとめ、隊

伍を整えて防府駅から無蓋車の復員列車に乗った。

父が住職を務める寺のある

広島は防府から近く、広島駅に着いたのは真夜中だった。

駅は建物の外側だけが残っていた。駅前には人々、気は全くなく、青白い燐が燃えていた。

## 廃虚の中 浄土を見る

「モノの心生む」我が道自覚

初めて見る凄惨な光景だ。

高性能の新型爆弾が広島に落とされたと聞いていたが、こんな悲惨な事態は想像もしていなかった。帰る先を福山

に近い母の実家に変えたが、そこで初めて二歳年下の妹、子の死を知った。原爆が落ちた時、母と弟と一番下の妹は

買い出しに行っていて命拾った。爆心地から二、離れた寺にいた父は被ばくし、後遺

症で一年半後に亡くなった。昌子は当時、広島女子高等師範付嵐山中高女二年生で、

今の平和記念公園の所で強制疎開作業に従事していた。母によると「昌子は『エクワン、

エクワン』と言って死んだらしい」という。遺体を焼いた場所に「エクワン」という標が立っていて、妹が「エクワン」と言ったのを、名前を

聞いた人が「エクワン」と聞いて、墓標に書いたらしい。それで、妹のお骨がわかったわけだが、人間は死の間際、自分がだれであるか、必死に訴えるのだなと思った。

数日して広島に戻ったが、文字通り廃虚であった。建物が焼け、電車が焼け、人もモノというモノすべてが焼け焦がされて地の上でうめき声を上げていた。

跡でたらずんでいたら、夕方、不思議な光景に遭った。夕日が差してきた瞬間、それまでの地獄絵だった風景が

ぼろぼろしたような感じがした。平清盛は瀬戸内の夕日に魅せられて、秀麗な厳島神社を造営したと聞く。美しい瀬戸内

とが自分の道であると自覚した。モノにも独自の世界がある。モノを作ることはモノの心を生むことだ。

私はこの後、東京芸術大学の同志と共にインスタストリアル・デザインという新分野に進んでGKデザイン機構を創設、卓上醤油びんから秋田新幹線「こまち」まで

広範な製品のデザインを手がけるが、道具世界を征服することが使命だと悟るようになった。



著者の最近の活動が使命だと悟るようになった。

インスタストリアル・デザインは、工業

の夕日には焼け跡を浄土に変えるパワーがあるのだから。夕日が沈んだ後の闇のどおりから私は、焼かれ、破壊されたモノたちが「自分たちを元に戻してくれ」と私に助けを求めている悲痛な叫びを聞いた。

衆生済度とは仏の道だが、私（インスタストリアル・デザイナー）はこの時、モノを済度する（

改革を意味した。日本には新しい生活文化への改革を意味した。

我が家は代々、広島県沼隈郡郷分村にある浄土真宗永久寺の住職を務めていた。祖父が壽栄、父は鉄念と言った。明治三十九年（一九〇六年）

# 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
おん けん ぶん ちく え

②

生まれの父は、大正九年（二〇年）に徳度し浄土宗の僧侶となった。

父は四人兄弟の三番目。長女壽香は広島県の萩にある阿弥陀寺に嫁いだ。兄は良弁と言い、吉野・丹治の金龍寺の住職になった。下の弟光丸は、後、ハワイに渡った。だ

から米国には「エクアン」という姓のいとこが多い。

母香津子は明治四十三年にハワイで生まれた。父親は広島県神石郡小島村出身の大工の棟梁で、ハワイに行ったが、体を壊して日本に帰ってきた。母が小学校三年くらいのころだ。

母は広島県の松永高等女学校を卒業後、東京の渡辺裁縫

## 1歳で渡航 寺の長男

青い空と海、裸足の暮らし

学校（後の東京女子専門学校）に通っている時、大正大学に在学中の父と知り合い結婚した。今風に言う「できちゃった婚」であろう。

私は昭和四年（一九二九年）九月十一日、東京府北豊島郡西巢鴨町九八七番地で長男として産声をあげた。両親は大正大学に近い同窓会風のモダンなアパートで生活していたよう

となつてゐる同窓会青山アパートのような建物だ。

父は大学卒業後、増上等の法主をされていた権尾弁匠というお師匠さんの元で、大蔵経の編さんに携わっていた。父は人前で演説したりするのが好きで、仏教を伝える伝道僧になりたがっていた。母がハワイで生まれたことが刺激となつて、ハワイに行くこと

ということになつたらしい。父は昭和五年十一月、ハワイ開教区開教使に任せられ、私は一歳の時に両親に連れられてハワイに渡った。父はホルルの浄土宗本部で開教使としての訓練を受けた後、昭和七年五月、ハワイ諸島で一番大きいハワイ島のハマクア部パウハウに赴任した。

昭和七年に妹の昌子がハワイで生まれ、日本に戻つてか

ら弟祥二が同十三年、末妹尚美が同十四年に生まれた。祥二は現在、日大芸術学部教授で、デザインを教えている。もの心ついた時はハワイだから、ハワイの風景が記憶の原風景だ。お寺は小高い所にあって、前が坂で、その先が



ハワイ島で幼児期を送る

の夕日と比べられるくらいきれいだ。父は私を肩車に乗せ「日は落ちる、日は落ちる」と叫ぶ。すると、大きな太陽がズンズンと落ちていく。

海だ。青い空、広々とした海、ハイビスカスの赤。靴ははかすにほとんど裸足で歩いていく。サトウキビ畑の間にいくつかの谷があり、サトウキビの茎をしゃぶりながらトボトボ歩く。マンゴーやグアバの木に登って実を採る。雄大な自然が身近にあった。

母は開教助員として父を助け、日曜学校など、お寺の手伝いをしていった。母にはほぼ毎日、お寺の欄干から妹と一緒に夕日を拝まされた。父には同じ太陽でもハワイ島西部のコナ地区からの夕日を拝まされた。コナの夕日はマニラの夕日と比べられるくらいきれいだ。父は私を肩車に乗せ「日は落ちる、日は落ちる」と叫ぶ。すると、大きな太陽がズンズンと落ちていく。父は新しいものが好きだった。自動車も、カメラも好きで、コダックのカメラで写真を撮っていた。ゴルフもよくして、両親は欧米生活にあこがれた近代主義者だったので、蓄音機、冷蔵庫など近代技術の産物は極めて早く取り入れていた。（インダストリアル・デザイナー）

デザイナー

# ホノカア小学校

六歳の時にホノカア小学校に入學した。ホノカアはパウハウに近いハワイ島北部の町だ。午前中、学校に行つて、昼食後、午後一時から二時間

## 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
けん けん あん かく え

③

ばかり日本語学校に通つた。小学校の先生はミス・ロビン先生で、何かの時、クエステヨマークを書かなかつた子は、みんなヒザの上に乘せられて、お尻をたたかれた。

生徒はいろいろな國から来た移民が多い。日系、ポチキーズ(ポルトガル人)、ヒリ

ピン(フィリピン人)、ハウタ、サクラガサイタ」だから、レ(白人)、ポトリコ(フエルトリコ人)など。五つ払つては食を取るが、メニューはたいいていキャベツとコンビーフの妙めたものとか、マカロニだ。おやつ代が一ドル。梅の種を甘く煮たクラッカーシー

ド、パブルチューインガムなどが買えた。運動会の一環としてボクシングの試合に出たことがあった。グローブをつけてリングに上がつて、子供同士でむちやくちやに手を出したのを覚えてる。ハイスクール生徒のアメリカンフットボールの試合もこの時初めて見た。

日本語学校の教科書は、「ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カラカサ、カラスガナイテイマス」だった。当時の日本の国定教科書は「サイタ、サイ

## 友達、世界中から集合

### 滝に飛び込む勇氣 評判に

・カウカウ」などと言葉の混ざり。お寺でクリスマスも祝った。

ハロウィーンもあつたが、ハワイにはカボチャがないので、パイアに穴をあけてロウソクを立てた。

日本語学校の教科書は、「ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カラカサ、カラスガナイテイマス」だった。当時の日本の国定教科書は「サイタ、サイ

んだ。大成功だったが、檀家中で「ハマクア教会の窓ちゃん」が滝に飛び込んだ」と評判になった。母にはしかられたが、こうした体験は私の意思決定の態度に大きな影響を及ぼしていると思う。

お寺は高床式の建物で、畳ではなく椅子席だった。坂を



このころに入学するところのホノカア小学校の母、妹と一緒に入學した。日本に戻つても、チャイナ・クリップ(飛行艇)、T型フォード、ハーシーのチョコレ

下つたところにヒロとホノカアにつながる道があつて、ガソリンスタンドがあつた。父はT型フォードに乗つており、シートの人レザーや自動車排ガスのおいさを好ましく覚えてる。ホノカアの町ではいろいろな國の出身者が集まり、それぞれの風習で生活していた。

デザイナー

昭和十二年（一九三七年）

に急ぎよ、帰国することになった。ホノルルから「エンブレス・オブ・カナダ」号に乗って神戸に着いた。

# 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
じ げん めん く え

④

療養生活はヒロにある公立のサナトリウムで送った。母が言つには、風邪をひいてゐるのに自分でドライブし山奥にまで説教にいったらしく、無理がたたつたのであろう。米國では当時、結核患者が出ると、住んでいた家は全部壊し、燃やしてしまつた。

父の実家のある広島県の郷分に行った。そこでいくつかに進んでいるというのが実

## 日本流の生活戸惑う

母が特訓、図工は得意科目

のカルチャーショックを受け

た。第一はくみ取り式トイレ。

第二は牛の糞やフナなど農家

のにおい。第三が川に魚がいることだ。小川をせき止めて小魚やワナキを捕ったりした。ただ、困つたのは、刺し身やたら、塩辛の類で、今でも少し抵抗感がある。

私は最初、英語でしゃべつて、

を去る時に、友達が「さよなら、さよなら」と言つて手渡してくるものがあった。手を開いたら二錢玉があった。こつした友情の経験はハワイではなかつたので、その時の印象は今でも残っている。

当時の私はいわゆる帰国子女のような存在だが、日本の田舎に比べハワイの方がはるかに進んでいるというのが実

感だつた。

同年十月、西農第一尋常小学校（現東京都豊島区立西農第一小学校）二年生に編入さ

れ、以前、父母たちが住んでいた近所に暮らすようになった。父はお寺を持たないで、

伝通院の伝通院会館に勤めて

布教活動を行った。また、大

正大学の先生方の知恵や力を

返しと思つたのであろう。

日本の男にしたいという親の見栄みだいなところから、母による勉強の特訓が始まつた。例えば工作の宿題では、「こつこつこつに作るのよ」と手本を示す。それを学校に持っていけばよいと思つた。

学費を作つた。ハワイへの恩

などを作つたりした。

三年の二学期には級長になつた。担任の先生が父母会で、

ハワイの帰国子女が短期間で級長になつたとほめたものだから、母は鼻高々だつたらしい。ひどい母親だと思つた時

もあつたが、おかげで競争というものを覚え、結果的に私

にリーダーシップをとることを教えた。

三年生の時には伝通院のボーイスカウトに入れられた。私は当時、腕力もあり、子供の中でも強かつたから、それが肉体的自信にもなつた。小学校では相撲部に入り、五年生の時、朝日新聞の健康優良児に選ばれた。そのころは、あちこちの町内で子供の相撲大会があり、その大会に出場して優勝し、鉛筆など賞品をもらったこともあつた。



作者の姿 ボーイスカウト

特訓の成果あつて図工が好

きになった。このころ、ノミ、

教育ママとなった母は、「お前は一中、一高、東大独法科を出て、高文試験に合格しなさい」と私によく言ったものだ。父の仕事を見て、古くさ

# 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
けん けん ぶん ちく え

⑤

い僧侶の世界にモダニズムはないと思つたようだ。

勉強にはやまかましい母にもおろかなところがあった。

私はやんちゃだったから、男の子だけでなく女の子も押でたたいに泣かせた。隣組が総出でうちを押し掛けてきて、母は平謝りだったが、私には

ケンカするなどもひと言も言わなかった。コールドールで、ひとのうちの玄関に落書きをした時も、母が「申し訳ない」と言つて消しに行つたが、何も言われなかった。

父にしかられたのは二度しかない。父が結核の手術の後、家に帰ってきて、父と妹と私の三人で風呂に入った。父の背中の手術跡を見てすごいな

## 「一高、東大へ」母の口癖

集中力の大切さ 父に学ぶ

と思ひながら、なにかの加減で妹をたたいた。そうしたら父が私の頬を平手打ちした。よくないことをわかつてやることは、よくないことだと、教えよつとしたのだと思つた。

もう一回は、小学校四年か五年生の冬、真っ赤に焼けた炭を火鉢に持っていこうとして、青畳の上にまき散らしてしまつた。私があわてていると、父は「ケンジ、事をなす

に哲学も宗教もない」と大言声でしかつた。いったん事を決めたら、一生懸命に集中してやれということだった。父は説教師で声が大きいから、怒られると怖かった。

父は盆栽や絵、彫刻、骨董が好きだった。重話を話すがうまく、ある時、小学校に重話を話しに来たが、友達は私の父だと知っているから恥

ずかしかつた。普段の印象は全然、重話っぽくなく、日本刀に打ち粉をしている姿など美的なナルシストのイメージが強い。

当時、中学校の受験競争は五年くらいから始まり、その前哨戦が級長か副級長になるかで、私は六年生まで級長を続けた。母は一中のある永田町まで私を連れていったが、学区制が決定し、私は府立五

中（現東京都立小石川高等学校）に進むことになった。

中学入学前の年に戦争が始まった。父が作ったハワイ学寮にはたくさん日系二世がいて、大正大学、高等師範など日本の大学で学んでいたが、多くの人が開戦で帰れなくなった。私が記憶している



府立五中に入ったが、制服は軍服

に戦闘帽に替わっていた。

英語の授業で英語の本を読まされた時、「君の発音はいね。どついうわけ」と質問された。幼児期にハワイにいたことを説明すると、「そうか、大事にしたまえ」と励まされた。いまだにクラス会で「お前、あの時だけは違つていたな」と言われる。

のは二人で、一人は二重国籍を選び、日本国籍を選んだもの一人は海軍に召集され、まもなく戦死してしまつた。

五中は初代校長が伊藤長七という人で、英国のイートン校を模して制服はネクタイに背広で、開拓創作の精神をモットーとしていた。ただ、我々の一学期から、制服は軍服

て五中の廊下をさつそうと歩いていてのを見た。こんな格好い存在が世の中にあるのかと、一目で海軍兵学校におこがれた。こうして母の夢見

ていた「一高、東大……」という出世路線はだんだん危うくなっていった。（インダストリアル・デザイナー）

昭和十七年（一九四二年）

四月十八日、五中で掃除を終えてバケツを整理していた時、上野の不忍池の方向に二機の飛行機が超低空で飛んで

# 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
けん けん あん かく え

⑤

いるのが見えた。「あれ、日本の飛行機ではないな」と思ったら、高射砲が地上から射ち出し始めた。これが、空母ホーネットから発艦し、東京を初空襲したB25ドリットル爆撃隊だった。

五中できっとも勉強したの、は二年へり二年で、三年で

なると兵器廠での学徒動員、軍事教練、援農作業などで勉強どころではなくなった。

昭和十九年当時の記録を見ると、四月五日から三週間、十条の陸軍兵器補給廠へ。倉庫より製品を搬出。五月一日、富士の裾野へ野外教練、六日、富士の裾野へ野外教練、三八式歩兵銃などの訓練。十月二十一日から約二週間、立川近郊の出征軍人の留守宅へ

三時の菓まんだった。

同級生の兼重一郎は、ここで昭和二十年三月十日の東京大空襲を経験した。飛鳥山から十条までの道すがら、全部、焼け野原だったが、飛鳥山の桜だけは満開だった」と述懐していた。彼は後に、いすゞ自動車専務になった。当時の悲しい思い出が、六月二十一日から約二カ月、江

## 文化財壊す悲劇 体感

3年終了で海軍兵学校へ

援農作業。陸稲刈り、イモ掘り、牛を引いて土手の草を食わせる。

戸川橋付近で行った民家強制疎開だ。空襲を受けた時に類焼を防ぐ避難地を作るための家の取り壊し作業のことだ。

数寄屋風の見事な日本建築の家も、我々中学生が畳や建具を搬出した後、大学生が壁を打ち抜き、屋根にロープを掛けて皆で引き倒す。家の住人のうらめしそうな表情が目

は違う耐えがたさがある。

家族は十九年十月、父が広島市の戒善寺（現中区小町）の住職になったため、私だけを残して引越した。私は永田町に下宿した。父の弟が戦争でハワイに帰れなくなって日本にとどまっていたが、そのお嬢さんの実家が永田町で待



海軍兵学校受験で添付した写真

二十年二月に合格電報が届いた。兵学校は普通四年終了で入るが、我々のころは一年繰り上がって三年終了で入れた。外地も含め受験者は大変な数にのぼったが、三千八百人が合格した。すぐに兵科教育に入るのではなく、専門学校の予科的な感じだった。正式には海軍兵学校七十八期生徒だが、通称は予科生徒と呼ばれていた。

三月のある夜、送別会もなく、単身、東京駅から広島行きの列車に乗ろうという時、薄暗がりから遣兵廠掃りの田中和雄と鈴木善夫が現れた。「そうか、行くのか」「元気でやれよ」と声をかけられて、「分かった、それじゃ」と言った

が目頭が熱くなった。見送る二人が駅の光に包まれる。私は挙手の礼で応えた。（インダストリアル・デザイナー）

深を測る問題が出た。

江田島に行く途中、家族が

住む広島島の戒善寺に寄った。

戒善寺は地獄極楽の絵で有名な寺だった。作者は知らないが、年に一回開帳した。私も

# 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
けん へん ぶん かく え

①

れない。翌日、妹の昌子が見送ってくれた。それが妹との最後の別れとなった。

江田島には遅れて到着してしまっただけで、同期全員が整列しているところにハワイから持ち帰ったトランクを掲げ、敬礼して「栄久庵憲司生徒、ただいま到着しました」と大声で言った。同期が集まると、「遅れてきたくせに、東京の

## 前日の晩餐 父が嗚咽

体操教官、今でも心の英雄

坊っちゃん面して来た」と今でも冷やかされる。

この時期になると、我々の期の教育は江田島ではなく、長崎の針尾分校で行われた。

いまオランダの街並みで有名なハウステンボスがある場所

で、後に私のデザインで記念碑が建った。一分隊が四十八

人、十二分隊集まって部になる。それが七部あり、私は三部の第七分隊に所属した。

朝起きると、海に向かって号令をかける発声訓練。その後、上半身裸で海軍体操をする。三千八百人が寸分の違ひなくきちんと並び、全員が同じ動作をするから実に壮観。

「レディー・ビギン」などと全部、英語だ。体操は海軍生徒必須の訓練だった。指導教官は聲をたくわえた堀内豊秋大佐である。

開戦当時、セレベス島メナドの落下傘降下部隊の司令で、デンマーク体操を海軍に導入した。柔らかく猫のように敏捷でバランスのある身体をつくり上げることが目標だ。

その一つが空中転回で、踏み切る時に今までにない勇気がいる。大佐はにこやかにユ

ーモアも交えながら、忍耐強く指導してくれた。怖さが

少し減り、空中の姿勢が

見えるようになる。全員ができるようになった。大佐は戦後、メナドで行われた軍事裁判で死刑になったが、今でも海軍魂の精髓を教わった同期会員の心の英雄である。

食事もよかった。銀しゃりで一汁二菜だ。五月二十七日の海軍記念日は汁粉が出た。

敵ともなった。食事の前には、モールス信号の聴き取りテストをやらされた。



筆者がデザインした海軍兵学校針尾分校の碑 (1992年9月建立)

クラスに川口正純というモジュール信号の名手がいた。優秀な男で戦後、三菱銀行に入り、欧州三菱の頭取になった。後に、私が国際デザイン組織の会議で欧州にいくと、彼の家で御馳走になったものだ。

四月に初めて第一種軍装(紺)による外出許可が出た。階段の踊り場にある鏡の前でぱっと見

けれども食べ盛りですぐ食べ過ぎてしまったので、箸をわざとわざと左手にもち、ご飯粒を一粒ずつ食べた記憶がある。

食堂で食事をしていると、背後でコールドクリームのおいがする。女子挺身隊の人が「何か細かいものはありませんか」とたずねる。我々より少し年上だが、新たな性の刺

て、また集合場所でお互いに服装をチェックして外出する。針尾の周りは家があるわけではなく、見せる人がいない。だが、高橋に尻までのジャケツト、キラツとした短剣を佩いた我が姿に海軍将校生徒の誇りを感じていた。(インダストリアル・ニズナナ)

昭和十九年（一九四四年）七月、針尾分校は空襲が激しくなったので、山口県海兵防府分校に移転した。戦局は急を告げ、本土決戦に備え七

# 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
じ けん あん かく え

⑧

を仕掛けて敵艦に体当たりする特攻兵器だと聞いた。

終戦直前、兵学校出身の分隊監事が戦況について「諸君、わが海軍は丸通になった」と言った。戦う軍隊ではなく、モノを運ぶ運送会社のようになったという意味だった。

終戦から復員にかけての経緯は先に触れたが、広島の戒厳令が焼けてしまったため、

## 広島の子再建、父他界

自分の道が定まらず悩む

我々家族は父の姉のいる福山市の郷に移った。私は東京の五中に戻りたかったが、こうした状況ではどうもいかず、福山誠之館中学（現広島県立福山誠之館高校）の四年に編入することになった。

福山は瀬戸内に面した風光明媚なところで、朝鮮半島からの使節団が上落する折の宿泊地の一つだった。聞いてみれば

私が「柄はきれいだ」と言ったら、父が「自分のものだと思つたらもつときれいに見える」と言った。最近になってその意味がわかった。地球を自らのものと心得た時に初めて地球を意識し、その美しさを守ろうという気持ちになるのだ。

誠之館中学の前身は福山藩の藩校。私は精神的にあいまいな状態にあったが、親切に接してくれた友人が何人かいた。その一人が鹿島守之助氏の甥で八重洲ブックセンター前会長の河相金次郎君だ。

昭和二十一年夏、父は広島に出かけ、生き残った檀家さんと相談して、お寺の跡に二間に台所が付いた白壁の小屋（寺）を建て、年の暮れに家族はそこに引っ越した。

り、翌二十二年の一月六日に亡くなった。父は自分の最期が分かっていたのだろう。だから自分が住職をする寺で死にたかったのだと思う。



父が建てた白壁の小屋

死ぬ一日前、父が浄土宗の高祖「普賢大師が夢に出てきた」とこりほほ笑んだ顔が忘れられない。父のコダツ

父は仏教を新しい解釈で布教していたつもりだろうが、私にはそうは思えず、いろいろして自分の道が定まらない。そんな時に親類から持ち上がった話が、お寺を再建して継がなければいけない立場だから「憲司を仏教専門学校に入れろ」だった。

クのカメラを広島駅前の關市で交換したのが、米国製のバリリス・オレンシジューズ一本。それを持って帰ったら父が、「バリリスか。こういうものが日本にもあるのかね」とおもしろそうに飲んだ。その夜、息を引き取った。父の葬式を済ませてから、（インダストリアル・



# 仏教専門学校

仏教専門学校(現仏教大学)  
は京都の千本北大路にあつた。私が寄宿したのが、知恩院の山内にあつた維志学寮。本来はお寺の子弟が寄宿する

## 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
けん ろん かく え

9

所だが、私のころは京大の学生も寄宿していた。寮長は藤吉慈海さん。とても立派な方で、最後は鎌倉の光明寺の法主で亡くなりました。

知恩院は、いま京都の浄土宗の大パビリオンだ。その中に建築、庭園、美術一般がすべて入っている。庭園を

ねお茶に呼ばれることもあつた。このころ、日本の代表的な風景に間近に接し、私の人生に大きな影響を与えた。

学校には心にびたつとするものがなく、便便と日を送つた。そんな中で、私は絵を描くようになった。だから、スケッチブックは常に持っていて、講義の時に絵を描いてしかられたこともあつた。静物

### 「東京の美校」思い募る

寮に荷物残したまま上京

の写生が主だった。その時の同級生にいま浄土宗の宗務総長をしている水谷幸正さんがいる。私のことをよく覚えていてくれて何かと声をかけてくれる。水谷さんは、説教も上手で、人を元気づけるような説教をする。

寮から学校に通う途中に工業繊維学校(現京都工業繊維大学)があつた。そこでは図

と芸術は多少違つが、仏壇などに施された意匠とイメージが重なつたのである。だれかから「言はもともと東京だろう。それなら東京美術学校があるではないか」と言われ、東京の美校に行きたいという気持ちが高つていった。

それで、夏休みの前だったか、退学届けも出さず、荷物も寮に置いたまま上京した。その前に、母に「東京に行きたい」と相談したら、「二つ返事で「いいよ」と言った。母も心の中では東京に憧れていたのではないかと思う。

東京では中学校の同級生、田中和雄の家に昔のよしみで転がり込んだ。彼も焼け出され、日本女子大の裏に住んでいた。彼に相談して美校の調査を始めたが、学制が変わつて美校に入るには新制高校の

卒業資格が必要ことがわかつた。それで母校の五中(その時は五高)に行った。五高に籍は置いたが、広島と東京の間を行ったり来たりだった。広島では、私が僧衣を着てお経をあげなければいけなかつた。

知恩院の維志学寮を飛び出



えている。檀家さんの祥月命日で檀家さんがお布施を渡そうとするので、ろくなお経もあげられないのにと逃げるように文閲を出た。奥さんが追いかけてきて「これは私があげるのではなくて阿弥陀様が差し上げるものですから」と言つて、衣の中に入れてくれた。

お経をあげることは仏の心だ。お布施は仏様が私にくださったもの。だから、私は仏様の心を伝えていくのだと思つた。そこで

したが、お寺を続けるならば、もう一度勉強しなければいけないと言われ、東京で浪人中に芝の増上寺で二月ほど特別講習を受け、京都の百万遍にある知恩寺で加行を受けて正式の僧侶になった。

なお、八日付で書いた海兵針尾分校の防府移転は、昭和二十年(一九四五年)であつた。

若い坊さんは、新発意さんと呼ばれた。お布施を初めてもらった時のことを説明に覚

インダストリアル・デザイン

新学制下、東京美術大学の最初の入学試験は昭和二十四年（一九四九年）中途に行われた。私は絵がまだままならなれないと思ひ、見送った。その

# 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
けん けん あん けん けん え

⑩

の力ボチャを描いてみるという。鉛筆淡彩で描いたが、力量を試されたようだ。

友達の家にも長くはいられず、本郷に下宿を探した。私が夏休みで広島に向かっている最中、下宿が火事で焼けてしまった。隣部屋の友人が右田武夫という男で、片づいたから帰る必要はないと電報が届いた。彼は先に私の布団を

そこで絵を描いていた。わびしいが、希望があった。道のない悲しき青春ではな

く、道を得た喜びにあふれた青春。どこに行くのでもスケッチブックと鉛筆、筆は離さない。「筆を折らない」と心に誓った。おかげで翌年、東京美術大学に入学できた。志望は最初から**図案科**だった。油絵や日本画、彫刻では

## 道を得た喜びの青春

### 広島の新奇な趣向試す

持ち出してくれたが、自分のものはすべて焼いてしまった。最近まで「新評」という雑誌の編集長をしていた。

彼は当時、役所に勤めていた。二人とも行くところがないので、彼が役所のどこかで掘っ立て小屋を見つければ、「お前も隣のことで寝ていろ」と言われ居候した。絵の練習は欠かさないで、街頭の探電球

種のヒーロー感にひたることのできた。

とはいえ、東京で学生、広島で家計を助けるための僧侶という二重生活は続いた。檀家の中には絵が描けるお坊さんと聞いて、白地を染めるのにどんな模様がいいかと相談



する者がいて、唐草模様の絵を描いたりした。

広島では市街地の区画整理が進められていて、私のお寺の敷地の半分がその対象に入った。この際、無縁仏を整理するなど、新しいタイプのお寺にしたいと思った。

国人の彫刻家イサム・ノグチが来日し、広島平和大橋などのデザインをしていた。私は

ノグチの作品は、失われた「日本の魂」をよくとらえた感じ

がして影響を受けた。無縁仏はさびしい場所にあつたので、にぎやかな所に出して挿んでもらおうと考えた。爆風でやられたお墓の石を奥め、その上に小さく砕いた黒曜石をセメントで練って上塗りした。父のお墓もオブジェ風にし、合掌して東から光が入るようにした。

そつしたら教区の人から「私が出た後、お寺を明るくしたと市から表彰を受けたと聞いた。新奇な試みも、芸術家の自己表現というよりは、焼けた広島を新しくしたいという思いが先にあつた。」